



大手前大学
大手前短期大学リポジトリ

ゼロ初級学習者への日本語教育の実践と成果

著者	鈴木 基伸, 荒木 弘子, 梅野 由香里
雑誌名	大手前大学論集
巻	19
ページ	279-291
発行年	2019-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1160/00001982/



ゼロ初級学習者への日本語教育の実践と成果

鈴木 基伸, 荒木 弘子^{*}, 梅野由香里^{**}

要 旨

本稿は、ゼロ初級学習者がメインとなる短期研修プログラムにおいて実践した授業方法と成果について報告するものである。報告の対象となるのは、平成30年7月に大手前大学が慈済科技大学（台湾）から5名の学生を受け入れて実施した2週間の短期研修である。研修は①短期集中日本語クラスへの参加、②学部クラスへの参加、③エクスカージョンであった。研修最終日には研修成果発表会が予定されていたため、最終日のプレゼンテーションに焦点を合わせて短期集中日本語クラスのシラバスを組んだ。結果として研修成果発表会では一定の成果を挙げることができたが、問題点が無かったわけではない。本稿では研修期間中の短期集中日本語クラスの内容を具体的に述べ、研修成果発表会を通して見られた問題点をいくつか指摘し、日本語短期研修のあり方について議論を行う。

キーワード：日本語教育、教授法、ゼロ初級、短期集中日本語クラス

1. はじめに

大手前大学では、平成30年7月9日から21日までの約2週間の間、台湾の慈済科技大学（Tzu Chi University of Science and Technology）¹⁾より短期日本語研修生の受け入れを行った。受け入れ人数は学部生が5名、引率の教員が1名であった。事前の情報では、引率の教員も含め、ほとんどが日本語学習の経験がない「ゼロ初級」レベルであり、ひらがなの読み書きから始める必要があるということであった。

^{*} 愛知淑徳大学非常勤講師
^{**} 大阪大学非常勤講師

大手前大学では留学生向けの日本語クラスが、さくら夙川、いたみ稲野の両キャンパスにおいてそれぞれ週8コマずつ、技能別に「読解」「会話」「文法」「作文」のクラスがそれぞれ3つのレベルで開講されている。

表1 大手前大学における日本語クラス

レベル	科目名	開講キャンパス	
		さくら夙川	いたみ稲野
1年生レベル (レベルナンバー100)	日本語読解Ⅰ・Ⅱ 日本語会話Ⅰ・Ⅱ 日本語文法Ⅰ・Ⅱ 日本語作文Ⅰ・Ⅱ	× ²⁾	○
2年生レベル (レベルナンバー200)	日本語読解Ⅲ・Ⅳ 日本語会話Ⅲ・Ⅳ 日本語文法Ⅲ・Ⅳ 日本語作文Ⅲ・Ⅳ	○	○
3年生レベル (レベルナンバー300)	日本語読解Ⅴ・Ⅵ 日本語会話Ⅴ・Ⅵ 日本語文法Ⅴ・Ⅵ 日本語作文Ⅴ・Ⅵ	○	×

レベルナンバーが最も低い1年生向けのレベル100のクラスであっても、日本語能力試験 (JLPT) のN2レベルで設定されているため、すべて中上級レベル以上のクラスだといえる。したがって、研修生が上記のいずれかのクラスに入って日本語を学習することはレベルが合っていないため不可能である。また、交換留学生向けに設定された「日本語会話Ⅰ」のクラスがあり、そのクラスでは初級までレベルが下げられているが、週一回の開講であるため、研修生が参加することは不可能ではないものの、そのみで短期研修の日本語クラスを充足させることはできない。

上記のような理由から、短期研修向けの日本語クラスを新たに設定する必要がある。また、研修最終日には、パワーポイントを使用した簡単なプレゼンテーションを行ってもらう予定であったため、ゼロ初級からプレゼンが可能になるまでのレベルアップを2週間弱の間で実現する必要がある。本稿では、今回の研修で実施したプログラムについて紹介した後、研修終了後の成果について述べ、ゼロ初級の学習者向けに設計したコース内容の有効性と反省点を論じることにより、短期日本語研修において有効かつ効果的なプログラムとはどのようなものかということについて議論を行う。

2. 慈済科技大学短期研修の概要

研修は2週間にわたって行われた。研修内容は、①短期集中日本語クラスへの参加（慈済科技大学専用）、②学部クラスへの参加、③エクスカージョン（日本文化体験の小旅行）の3つに大別される。短期集中日本語クラスは基本的に毎日午前中の1・2限に開講され、それ以外の時間を使って学部クラスへの参加やエクスカージョンを行った。①短期集中日本語クラスは、全12回で構成され、3人の講師で担当した。研修最終日には研修成果発表会を行った。②の学部クラスへの参加は、日本語を学ぶというよりは、大手前大学での授業を体験するというところに主眼が置かれている。したがって、行われる講義内容も、研修生のレベルに合わせて変えるということとはしなかった。③エクスカージョンは、日本の文化や習慣を体験することを目的としたものであり、一週目は西宮神社、二週目は姫路城への見学旅行を行った。スケジュール概要を図1に示す。

	1 週目	2 週目
短期集中日本語クラス		
学部クラス	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">日本語会話 I</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">マンガ表現</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">Basic Logical Thinking</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">Basic Business Communication</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">Introduction to Japanology</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">Basic Logical Thinking</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">日本語会話 I</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">日本語文法Ⅲ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">Basic Business Communication</div> </div>
エクスカージョン	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">西宮神社見学</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100%;">姫路城見学</div>

図1 研修スケジュールの概要³⁾

2週間の研修期間中、短期集中日本語クラスに割り当てられるのは全体の半分以下である。それ以外は学部クラスへの参加やエクスカージョンとなっている。このことからわかるように、今回の短期研修の目的は日本語の習得というよりは、大手前大学での日本語・日本文化体験という側面が強い。そのため、研修参加者の日本語に対するモチベーションにもばらつきが見られた。後述するが、それが短期集中日本語クラスを運営する上での障害ともなった。

3. 研修生のレベルとコースシラバス

研修には、5名の学生に加え引率の教員も参加したが、以下では5名の学生のみを対象を絞って記述を行う。初回のクラスでは、研修生の日本語レベルを計るためのアンケートを実施した。文字の読めない学習者のために、中国語（繁体字）での表記も付した。

アンケートの内容は主に日本語の学習歴とひらがな・カタカナが読めるかどうかということである。学習歴については記述式で、ひらがな・カタカナの能力については選択式とした。また、ニーズ調査として、ひらがな・カタカナを読める／書けるようになりたいか、という質問項目も設けた。最後に、自由記述式で、知っている日本語の挨拶についても質問した。アンケート内容を以下に示す。

【アンケート内容】

1. どのくらい日本語を勉強しましたか？（請問學日語多久？）
2. ひらがなは読めますか？（請問能讀平假名嗎？）
 - a. 全部読める（全部能讀）
 - b. だいたい読める（大概能讀）
 - c. 半分ぐらい読める（一半能讀）
 - d. すこし読める（一點點能讀）
 - e. 全然読めない（完全不能讀）
3. カタカナは読めますか？（請問能讀片假名嗎？）
 - a. 全部読める（全部能讀）
 - b. だいたい読める（大概能讀）
 - c. 半分ぐらい読める（一半能讀）
 - d. すこし読める（一點點能讀）
 - e. 全然読めない（完全不能讀）
4. ひらがな・カタカナが読める／書けるようになりたいですか？
（希望能讀／寫平假名・片假名嗎？）
 - a. はい（是）
 - b. いいえ（否）
5. 知っている日本語の「挨拶」を書いてください。
（請寫下你／妳知道的日語問候語）

各項目のアンケート結果を表2～表6に示す。

事前の情報では、1名のみが学習歴ありということであったが、実際には2名が学習歴ありであった。ただし学習歴ありの学生であっても、「ありがとう」「おはようございます」「こんばんは」など、長音部分の表記や、「は」と「わ」の表記の混同などが見られ、初級前半のレベルであることがわかる。また学習歴なしであっても、ローマ字で挨拶表現を書いた学生もいたが、学習歴なしでも知っているということは、「一般常識と

表2 日本語学習歴

学習期間	人数
なし	3人
3カ月	1人
1年	1人

表3 ひらがな能力（読み）

読める程度	人数
全部読める	1人
だいたい読める	1人
半分ぐらい読める	0人
すこし読める	0人
全然読めない	3人

表4 カタカナ能力（読み）

読める程度	人数
全部読める	0人
だいたい読める	0人
半分ぐらい読める	1人
すこし読める	1人
全然読めない	3人

表5 ひらがな／カタカナに関する希望

ひらがな・カタカナが読める／ 書けるようになりたいですか？	人数
はい	3人
いいえ	2人

表6 知っている日本語の「挨拶」

Aさん (学習歴1年)	ありがと とも おはようございます はい
Bさん (学習歴3か月)	こんにちは おはようございます こんばんわ
Dさん (学習歴なし)	無記入
Eさん (学習歴なし)	gomannasi konbanea
Fさん (学習歴なし)	ohayoo gozaimasu konichiwa konbanwa

しての外国語の挨拶表現」という範囲内の知識であると考えられる。

以上のことから、学習歴ありの学生はいるものの、文字や音声に関する知識は十分ではないとして、短期集中日本語クラスの初回は、日本語の文字と音声に関する説明をする必要があった。しかしながら、ひらがな・カタカナを丁寧にやっ払いこうとすると、それだけで研修が終わってしまう。アンケートの質問項目4では、ひらがな・カタカナの習得に関する希望に関して質問したが、全員が「はい」という答えではなかったことや、最終日に口頭で日本語プレゼンテーションを行ってもらう必要があることから、文字について学ぶのは1時間のみとし、それ以降は名詞、形容詞、動詞の語彙の習得、文法形式（助詞）の習得、句型（「～は…です」）の習得を順番に行っていき、それらを組み合わせることで最終的にプレゼンテーションが可能になるようなシラバスを作成した短期集中日本語クラスの概要を表7に示す。

表7 短期集中日本語クラスの概要

	回数	テーマ	内容
一日目	1	ひらがな・カタカナ	ひらがな・カタカナについて学ぶ。
	2	名詞を学ぶ	色々なものの名前(名詞)について学ぶ。
二日目	3	自己紹介	基本文型(N1はN2です)を使い、自己紹介文を作成し、発表する。
	4	他己紹介	基本文型を使って、他者を紹介する他己紹介を行う。
三日目	5	動詞・助詞を学ぶ (1)	『みんなの日本語I』第5課を使用し、動詞・助詞について学ぶ。
	6	動詞・助詞を学ぶ (2)	『みんなの日本語I』第5課を使用し、動詞・助詞について学ぶ。
四日目	7	形容詞を学ぶ (1)	『みんなの日本語I』第8課を使用し、形容詞について学ぶ。
	8	形容詞を学ぶ (2)	『みんなの日本語I』第8課を使用し、形容詞について学ぶ。
五日目	9	ハガ文 (～は…です)	『みんなの日本語I』第9課を使用し、ハガ文(～は…です)について学ぶ。
六日目	10	発表原稿の作成 (1)	日本語発表会用の発表原稿を作成する。
七日目	11	発表原稿の作成 (2)	日本語発表会用の発表原稿を作成する。
	12	発表原稿の作成 (3)	日本語発表会用の発表原稿を作成する。

4. 授業内容

4.1. ひらがな・カタカナの習得

短期集中日本語クラスの初回は、まず文字の説明から行った。またそれに伴って、音声単位としての拍や、母音と子音の組み合わせから日本語の音が成立していることについて説明を行った。2週間という短期集中のクラスであり、文字に割ける時間が1時間のみということであり、効率の良い指導方法が求められた。

ゼロ初級の学習者にひらがな・カタカナを1文字ずつ書いていくととも1時間で終わることができないため、授業ではパワーポイントを使用した。また、漢字圏の学習者ということもあり、漢字からの成り立ちについても説明した。これは、ただ単にひらがな・カタカナを暗記させるのではなく、彼らの母語表記に使用する漢字をくずすことによってひらがなが、部首の一部を使用することによってカタカナが成立したのだというストーリーを教えることによって、「文字の変遷」という枠組みの中で学

習させることを目的としたためである。

また同時に、50音図における「50」という数字の意味について、5つの母音と10の子音から組み合わされていることから説明を行った。さらに、ヤ行のイ・エの段、ワ行のイ・ウ・エの段が無いこと、「ん」は50音に含まれないが、実際には50音と一緒に学ばれること等、日本語音韻論的に重要だと思われることは、省略せずに丁寧に説明を行った。上述したような日本語の文字や音声の仕組みを説明することで、暗記に頼らない文字の習得を目指した。

4.2. 名詞・形容詞・動詞・文型の習得

4.2.1. 進行スケジュール

名詞・形容詞・動詞・文型の習得を目標とした回（二日目から五日目）では、『みんなの日本語 初級 I』（スリーエーネットワーク）に基づき授業を進めた。ただし、学生には本テキストを渡さず、独自に作成したレジユメを配布した。レジユメは主にひらがな、カタカナ、漢字で作成し、適宜アルファベットによる発音表記、中国語訳を加えた。また、授業中に用いたスライド資料にはひらがな・カタカナとアルファベットを併記した。なお、来日プログラムの目的が日本語習得に限ったものではないため、宿題は与えず、テストも行わなかった。

二日目、三日目、四日目は、同一教員が担当した。『みんなの日本語』一課あたり2コマを当て、文型の導入と文型を使った簡単な会話の練習を行った。いずれの授業も研修最終日に行われる発表会を見据えて組み立てた。授業の進行スケジュールは表8の通りである。

表8 授業の進行スケジュール

①	有名な人名を用いた文字クイズの実施。 (5問程度)
②	前回の授業の復習。前回学習した文型を用いて会話練習を行う。 (30分から60分程度)
③	レジユメに基づき新しい文型を学習する。語彙を入れ替えながら、応用練習を行う。 (60分から90分程度)
④	学習済みの文型をできるだけ多く用いた会話の練習を行う。

4.2.2. 導入した文型、導入方法

通常の留学生向けの日本語クラスとは異なり、体系的な日本語文法の習得が研修の主目的ではないことを考慮し、最終発表（テーマは「自己紹介と私の好きなもの」）で達成感が得られるよう、発表で使いやすい文型を与えた。二日目（第3・4回）の

目標は自己紹介、他己紹介ができることとした。使用した文型を以下に示す。

【二日目の使用文型】

1. わたし は マイク・ミラーです
2. サントスさん は 学生じゃ ありません
3. ミラーさん は 会社員ですか
4. サントスさん も 会社員です

(以上、『みんなの日本語』第一課より)

- 5-1. お国 は。台湾人です。
- 5-2. お仕事 は。教師です。
- 6-1. 好きな 動物 は なんですか。パンダです。
- 6-2. 好きな 野球選手 は誰ですか。大谷翔平です。

スライドとレジユメを通して以上の文型を学習した上で、レジユメに示した語彙リストを参考に名前、国籍、職業、好きなものについての自己紹介と他己紹介を行った。他己紹介の準備として、お互いの情報を聞き出すためのペアワークを行ったが、どのペアも学習した文型を用いてスムーズに会話を実践し、大きな問題は見られなかった。

三日目の目標は「今後の予定と過去の行動について説明できる」こととした。使用文型は以下のとおりである。

【三日目の使用文型】

1. わたし は 京都 へ 行きます。
2. わたし は タクシー で うち へ 帰ります。
3. わたし は 家族と 日本 へ 来ました。

(以上、『みんなの日本語』第五課より)

前日と同様に、スライドとレジユメを用いてそれぞれの文型の構造を説明した上で、代入練習を行なった。さらに、各自に異なるスケジュール表を配布し、お互いに過去の行動と今後の予定を伝え合うワークを行った。スケジュール表には訪問先、同行者、交通手段を記しておいた。ワークを通して「へ」や「と」などの助詞の使い方は概ね理解できたようであったが「行く」と「来る」の違いの理解、加えてタ形の使用に混乱が見られたため、適宜個別解説を行った。

四日目の目標は自分の好きなものの特徴について説明できることとした。使用文型は以下のとおりである。

【四日目の使用文型】

1. 桜 は きれいです。
2. 富士山 は 高いです。
3. 桜 は きれいな 花です。
4. 富士山 は 高い 山です。

(以上、『みんなの日本語』第八課より)

主に1と2の文型習得に力を入れ、3と4に関しては紹介にとどめた。二日目、三日目と同様の方法で文型の導入、応用練習を行ったが、大きな問題は見られなかった。なお、この日は研修第1週目の最終日(金曜日)であったため、ここまでの総復習として、学習済みの文型全てを用いた会話練習も行った。

五日目は担当者が初めて本コースを担当する教員であったため自己紹介、他己紹介から行った。自己紹介、他己紹介は事前に配布されていた語彙プリントを基に名前や大学での専門科目、出身地や趣味などを述べていた。指示などは、やはり媒介語を介さなければ伝わらなかったが媒介語の使用は指示のみに留め、文型項目の導入や説明などは板書の活用と目標言語である日本語のみで行うよう心掛けた。使用文型は以下の通りである。

【五日目の使用文型】

1. わたし は チョコレート が 好きです。
2. わたし は きゅうり が 嫌いです。
3. わたし は 野球 が 上手です。

(以上、『みんなの日本語』第九課より)

文型の導入と説明をした後、目標文型の定着を図るため代入練習を行った。ここでの語彙はパワーポイントで示し、絵とそれに対応する語彙をひらがな表記とローマ字表記両方で表記した。代入練習をした後に、自身について目標文型を用いて文作した。自身に関する文作はこれまでの授業で配布された語彙プリントや自身のノートを参考にすることが多く、ノートテイクと語彙プリントの重要性を感じた。学習者のレベルや学習意欲に差が見受けられたが特に大きな問題点はなかった。

七日目は翌日の研修成果発表会に向けた準備として発表原稿の作成を行った。発表会における発表テーマは前述の通り「自己紹介とわたしの好きなもの」である。全員がこれまでの配布プリントを見直しなが、学習した文型を用いて原稿作成に取り組んだがいずれの学生も、自身の好きなものの名称とそれを好む簡単な理由の説明にと

どまり、発表内容が不足していることを懸念していたため、内容を膨らませるために適宜質問を与えた。例えば、パンダをテーマに発表する学生には、「台湾にパンダはいるか」「どこにいるか」「そのパンダは大人か子供か」「名前は何か」などについて質問し、不明な点についてはインターネットを使って調べさせた。また同時に、各学生から個別に質問を受け付けながら、原稿作成の手助けをした。その際、学習済みの文型を用いることができるように工夫した。

発表原稿は全員が授業時間内にほぼ完成させることができた。授業担当者は原稿のコピーをとって、授業後に添削した上で、完成版を Word で作成し、学生に返却した。返却は Email に Word ファイルを添付する形で行ったが、一部の学生は通信環境の問題でメールを受信できなかったため、発表会前に十分な修正を施すことができなかったようであった。一方で、発表会前夜に台湾人授業アシスタントの手を借り、授業で扱わなかった文型や語彙も加えながら発表原稿の質を向上させた学生もいた。

4.3. 研修成果発表会

研修成果発表会は、研修の最終日に行われた。研修参加学生全員がパワーポイントを使って1分程度の発表を行った。原稿は担当教員と相談しながら作成し、ひらがなで作成する学生もいれば、ローマ字のみで作成する学生もいた。時間の都合上、全員が原稿を暗記することはできなかったが、研修初日は全く話すことができなかった学生も、立派に発表を終えることができた。

2週間に渡った短期研修は、最後の研修成果発表会で締めくくることがになった。短期集中日本語クラスでは、最後の研修成果発表会でプレゼンができるようになることを目的としてプログラムを組んだ。問題点は次節で述べるが、結果として全員が前に出てはっきりとした日本語で無事発表を終えることができた。このような結果になったのも、発表会でのプレゼンという明確な目標を立て、そこで使用する語彙や文型を順番に学習していったからであろう。最終日にプレゼンをするということは事前に学生に伝えておいたため、学生側も明確なゴールを持って日本語学習に臨むことができたと考えられる。

5. 問題点

本研修に参加した内、引率の教員を除いた5名の学生には、学習意欲と学習レベルにばらつきが見られた。そしてそのことが授業の進行において若干のやりにくさをもたらした。

まず、学習意欲と学習レベルによって、メモの取り方が異なっていた。5名中1名

は日本語学習歴が3ヶ月ほどあり、日本語習得に並々ならぬ意欲を示していたため、ひらがなとカタカナを用いてノートを取っていた。文字の習得に熱心な学生は他にも2名いた。そのうち1名はやはり日本語学習歴のある学生であった。残る2名のうち1名は、文型や語彙を覚える能力が高く、会話応用力においてもクラスで最も秀でていたが、文字の習得にはそれほどの興味を持ち合わせておらず、ひいては日本語習得に関しても大きな興味は持っていない様子であった。彼女は主にアルファベットを用いてノートを取っていた。最後の一名は学習意欲に欠けており、筆記にはアルファベットと台湾の注音符号を用いていた。つまり、5名の学生には、学習意欲と学習レベルの差のみならず、筆記文字にもばらつきが見られた。

この使用文字のばらつきは授業進行上若干の支障をもたらした。文字の習得にも意欲を見せていたグループは筆記に時間がかかるが、文字習得に対する意欲が欠けているグループは筆記に時間を費やさないため、後者は練習問題に取り組む際やノートテイクの際に時間を余らせ雑談を始める傾向にあった。

また、最終発表会において示されるべきそれぞれの2週間の努力も、原稿作成に用いた文字によっては評価されにくいものになったように思われた。発表は、全員が原稿を読み上げる形で行った。発表原稿で用いる言語は各学生に任されたため、ひらがなとカタカナで書く者、アルファベットで書く者、注音符号で書く者に分かれた。その結果、原稿をひらがなで書いた学生は読み間違えたり、読み方に迷ったりし、一方で、アルファベットあるいは注音記号で原稿を作成した学生は比較的スラスラと原稿を読み上げた。授業における彼らの取り組みを見ていない聴衆には、各学生の実際の努力の成果が正しく伝わらなかったのではないかと思われる。短期研修の総括となる発表会であるため、各自の研修中の取り組みと努力が発表の出来とが必ずしも連動しないという結果になったことは残念であった。ただ、意欲のある学生にアルファベットを用いるよう指示することも、意欲のない学生にひらがなでの筆記を強いることも、2週間のみの短期研修においては時間の無駄になる可能性がある。このことについては今後、工夫が必要になるだろう。

6. まとめと今後の課題

今回の短期研修では、二週間という限られた時間の中で、最終日の研修成果発表会で示される一定の成果が求められたため、「発表会でのプレゼン」ということを念頭においてプログラムを組んだ。結果として5名の学生が皆素晴らしいプレゼンをすることができた。この点で言えば、短期研修においてはある程度の目標をもってそこに向かうようにプログラムを組むことが望ましいと言えるかもしれない。

しかしながら問題が無いわけではない。前節で触れたように、発表することをゴールにしているため、その過程が学生によってはおろそかにされがちである。具体的にいえば、文字を覚えることに関心がない学生は、すべてローマ字表記で日本語を覚えようとする。結果としてプレゼンではできるものの、ひらがな・カタカナが読めないまま帰国することになり、そこに二週間の研修の成果を認めてよいものだろうか。反対に、文字に関心がありきちんと日本語を学習したいという学生は、そこに注力するため積み上げ式に学習ができていくといえるが、その努力がプレゼンの結果として表れるとは言い難い。

そもそも、ゼロ初級の学生が半分以上というクラスにおいて、かつ日本語のクラスに割けるのが12コマのみという状態において、研修成果を求めるようなプログラムを組むことが正しいのかについては議論の余地があろう。今回のように研修成果発表会を設ければ、そこに焦点を合わせて授業を組み立てるため、ある程度の成果は見られるかもしれない。しかしながら既に述べたように、それをクリアすることと、日本語の力が身に付くことは別の問題である。二週間という限られた時間の中でも、日本語運用能力を付けさせるという観点から見れば、文型積み上げ式にこだわらず、場面シラバスを用いた方がよいのかもしれない。しかしその場合、パワーポイントを使用したプレゼンテーションを行って研修の「成果」を見せることは難しくなるだろう。

今回のようなゼロ初級の学生がメインの短期研修のプログラムのありかたを考えた場合、学生に日本語の運用能力を付けさせるのか、研修成果発表会を設定して目に見える形で成果を示すのか、それとも他のやり方で運営するのはまだまだ議論の余地があるだろう。短期研修生を送る側、受ける側という学校側の思惑もあるため、一概にそれらの問題に対して答えを出すことは難しいかもしれない。しかしながら日本語教育のあり方を考える上では避けては通れない問題である。今後は他大学で実施されている短期研修プログラムのリサーチ等を通して、問題の解決に取り組みたい。

脚注

- 1) 台湾、花蓮市にある私立大学。1989年に設立され、看護学部（護理學院）、健康科技管理学部（健康科技管理學院）などを有する。
- 2) 交換留学生向けに設定された「日本語会話Ⅰ」（秋学期はリピート）のみ、さくら夙川キャンパスで開講されている。
- 3) 「日本語文法Ⅰ」「日本語文法Ⅲ」両クラスとも日本語科目であるが学部生向けに通年開講されているクラスである。そのため研修生が参加したクラスは通常のクラスではなく本コースで習得した文型を基にQAをするというクラスにした。学部生のクラスには中国人留学生が多いため理解できない箇所は中国語を媒介語とし活発にQAタスクを行っていた。

参考文献

登里民子・石井容子・今井寿枝・栗原幸則（2010）「インドネシア人介護福祉士候補者を対象とする日本語研修のコースデザイン：医療・看護・介護分野の専門日本語教育と、関西国際センターの教育理念との関係において」『国際交流基金日本語教育紀要』第6号，p. 41-56.

使用テキスト

スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語初級 I 本冊』